
夏の庭園

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の庭園

【Nコード】

N1614D

【作者名】

冴島岐之

【あらすじ】

絵を描く青年と、彼が出会った少女との物語。

over

もうすぐ、僕は二十回目の夏を迎える。

都会を抜けていく電車の中、流れていく景色を見つめている。速い。世の中はこんなにも速いスピードで、毎日止まることなく走り続けている。僕はその流れに身を任せている、しがない学生だ。

もうすぐ、もうすぐあの町に着く。

僕が生まれたのは、東京のど真ん中。自然なんてものとは無縁の、排気ガスとコンクリートの街。両親共に仕事が好きで、小さい頃から一人で過ごす時間は多かった。それでも、愛情だけは人一倍受けていたと、思っている。やりたいことはなんだって、やらせてくれた。僕の誕生日には、どんなに仕事が緊迫した状態にあっても、プレゼントとケーキを用意して、一緒に祝ったものだ。不満に思ったことなんて、一度もない。僕は、とても恵まれているのだ。

もうすぐ、あの町に。

今は、夏休みだ。僕の通う大学も、夏休み。いつはじまったかわからない習慣、夏休みの一人旅。今年も、僕はあの町へ向かっている。

多分、小学生の頃だ。学校は休みでも、両親には仕事があったから、僕は家で一人でいることが多かった。幼い頃から家を空けがちな両親のため、僕には日常的にしゃべる相手がいなかった。だから、友達もうまく作れず、会話を続ける方法もわからなくて、遊び相手は常に自分自身しかいなかった。そんな僕の、唯一の遊び。一人で外へ出ること。行ったことのない場所を探して、それが僕の小さな冒険だった。それが僕の、夏休みの過ごし方。

僕はもう、あの頃よりはずっと大人になった。けれどこの習慣は、長い休みが来るたびに僕の心に細く長く火をつける。泉のように欲望がふつつと湧きあがって、出かけずにはいられなくなるのだ。あの町へ向かうのは、それだけじゃないけれど。

《ねえ、また、来てくれる？》

僕は、何を期待しているんだろう。僕は。

目を閉じて、窓から視線を逸らした。読みかけのまま手に持っていた本を開く。カフカの『変身』だ。

今さら僕が会いに行ったって、どうにもならないことは理解している。どうせ、彼女には見えないのだ。それに、忘れているかもしれない。僕のことなんて。

顔が見れば、それでいいじゃないか。

結局、本には集中できなくてカバンの中にしまった。外の景色を眺める。緑が増えてきた。多分、あと十分もすれば着くのだろう。足元に置いた黒いケースに目をやる。

彼女にはもう、見せることができないけれど。

去年、僕は旅から帰ってすぐに一枚の絵を書き上げた。日の光の元で笑う彼女と、緑の絵。校内作品の中で、金賞を取った。もちろん大きなコンテストでは、あまりいい結果は出なかったけれど、それでも僕には大きな進歩だ。

飛行機雲が見えた。今にも消えそうな薄い、平べったい青い空に、白い飛行機雲。

もし、彼女に会えたら、教えてあげよう。こんなにも溢れている、美しい夏の色の話。

病院の、あの小さな庭園で、彼女はきっと待っている。

"END"

神様がわたしの前から光を消してしまったのには、きっと何か、わたしには到底理解できない理由があるのだと思う。

「先生、今日は晴れてるんだね」

音がした。誰かが入ってくる音。足音で、周防先生だとわかった。先生は、とてもゆっくり歩く。

「そつだよ、結ちゃん。よくわかったね」

「足の調子がいいの。あと、晴れてる日の匂いにするんだ」

「そつ、すごいね」

周防先生が、椅子に腰掛けたのがわかった。いつもの診察が始まる。もう慣れてしまったけれど、見えないことはやっぱり、時々不安になる。

わたしは、目が見えない。

見えなくなった日のことは、あまり覚えていない。とにかく、すごい事故だったそつだ。おじいちゃんとおばあちゃんがいる、この町に来る途中で。山間の道路、雷雨の日。突然起こった崖崩れに巻き込まれたそつだ。

そんな大事故の中、わたしは奇跡的に助かった。わたしは事故の後遺症なのか、事故当日の記憶が曖昧で、ほとんど覚えていない。車の前半分は空き缶みたいにぺしゃりと潰れていたが、わたしがいた後部座席はほとんどその形を保っていたのだと、おじいちゃんは

説明してくれた。

つまり、わたしの両親は土砂によって潰れてしまったのだ。その姿も充分に確認できないほどに。

そうして目が覚めたと思ったとき、わたしの目には何も映らなくなっていた。目を開けているような気がするのに、光が入ってこない。自分が目を開けているのかも、だんだん不安になった。それから目が見えなくなったのだと理解するのに、そう長くはかからなかった。

でも、見えなくなつてよかったのかもしれない、とも思う。

無惨な両親の姿も、動かなくなつてしまつたわたしの足がどんな形をしているのかも、知らなくてよかった。おじいちゃんとおばあちゃんの悲しむ顔も、知らない。

「本当に、体調はいいみたいだね。あとで散歩にでも行くかい？」

「いいの？ 行く！」

わたしの記憶はそれ以来、匂いと音だけで形作られている。見えていた頃の光景も歳月が過ぎるたびに色褪せて、人の顔になるとほとんど思い出せない。記憶の曖昧さをわたしはよく知っている。ぼんやりとしたものしか、わたしには残らなかった。

「きっと、すごく気持ちいいだろうなあ」

「そうだね、今日は本当に、よく晴れてる。雲ひとつない」

先生がそういいながら、頭をなでくれた。先生の手は大きくてあつたかくて好き。見えないけれど、先生はきつとすごくやさしく

てかつこいい顔をしていると思う。見れないのが、少しだけ残念だ。

「今日、来ないかなあ」

「春輝くん？」

「……うん」

先生の顔を見れないのは残念だけれど、わたしにはもつと見たいものがある。もし、一度でも、一瞬でもいい。またわたしの世界に光が戻ってくるのなら、見たいものがある。ようやく、そう思えるようになった。強く思えるものに、出逢った。

勇上春輝。

一年程前に突然現れた、不思議な青年。

彼は、美大生なのだった。画家になるのが夢だと、それだけでなく何か美術に関わる仕事をしていきたいのだと、話してくれた。

きっと彼の周りは、溢れるほどの光と鮮やかな色で埋め尽くされている。

わたしとは違う世界で生きる人。それが、勇上春輝という人だった。わたしにはそれが、目の見えなくなった世界の唯一の光みたいに思えた。

春輝のいる処は、きっときらきらしてる。わたしの唯一の、光。

「そういえば、もうすぐ八月になるね」

周防先生がふと、そういった。多分、この部屋のどこかにあるカレンダーを見ているんだと思う。声が出る方向が少し変わったから、違う所を見ているんだと感じた。

「きつともう、大学は夏休みだよね」

「……そうだね」

下半身にかかった蒲団をぎゅっと掴んだ。今日はいい天気だから、春輝に会いたい。いつも思うのだ。もう、こんなに晴れた日は来ないかもしれないと。わたしにはそういう漠然とした不安がある。

天気がいい日は、わたしの体の調子もいい。不思議なものだけれど、雨の日や雪の日、とにかく天気の良い日には足がひどく痛む。原因はわからない。だけど体はわたしの理解をずっと越えた敏感さと繊細さを持ち合わせていて、空気のわずかな変化や大地の動きに反応して、壊れた所からじわじわと伝えてくるのだ。

もう、こんなに天気の良い日は来ないかもしれない。わたしは、痛みを抱えたまま春輝には会いたくない。春輝には、元気なわたしだけを覚えていてほしいから。

これは、わがままだろうか。

「ねえ、周防先生。お散歩、いつ行ける？ 今日忙しいの？」

「午前の診療が終わったら、行けるよ。今日は往診の予定もないし、日曜日なんだ。結ちゃんがお昼いっぱい食べたら、それから行こう」

先生はそういいながら、また頭をなでてくれた。大きくてあったかくて、太陽みたいな手。なんでか泣きそうになったけれど、わたしは笑った。

久しぶりに外に出れるのが、嬉しかったから。

「うん。先生、ありがとう」

本当だつたらわたしは今、高校に通う年だ。秋が来れば、十七歳になる。けれど事故にあった中学一年の夏から、わたしはずっと病院にいる。

院内学級というものにも、通った。そのほとんどの時間は、点字を覚えることに費やされた。それから、歩くことに。

けれど結局、わたしは歩かなかった。

どこにも異常はないといわれたのだけれど、暗闇を歩くことをわたしは拒んだ。怖かったから。歩けるようになって、自分の足で動けても、どこへ向かっていても、そこは当てのない暗闇だった。わたしは周りに迷惑をかけてでも、歩かないことを選んだのだ。

手をひかれていても、ひとりのような気がした。

わたしはいつも、漠然とした不安と隣り合わせだ。

春輝に会いたい。

今はただ、それだけだ。

開いた窓から、風が吹き込んできた。やわらかい、太陽の熱をたくさん吸収した空気。おそらくこの病室は中庭を向いているのだろう。花の香りと、若葉の匂いがした。それらはわたしの髪を揺らし、この真つ暗な視界の中で、まるで足元を逃げていく川魚のようにするりと流れて、すぐに消えた。

あの空気はどこへ向かうのだろう。今はどこを漂う空気になっているのだろう。しばらく考えて、窓を閉めた。圧縮された空気がぶつかる。でもそれもすぐに消えてしまったから、なんだか悲しくなった。

わたしはここにいるのに。

音と匂いだけの世界には、確かなものが何もなくて、とてもさみしかった。

*
*
*

「おねえちゃん？」

うしろの方、おそらくこの病室の入口から、そう呼ぶ声が聞こえた。聞き慣れた、小さな男の子の声。

「おねえちゃん、入ってもいい？」

「うん、いいよ。怜でしょ？ おいで」

ベッドの上に座り直して、声のした方へにこりと笑って見せた。

怜はこの病院の近所に住んでいる子供で、虫が好き。虫のことならなんでも知っていて、楽しそうに話してくれる。

ぱたんぱたとスリッパを引きずりながら走りよって来る足音が聞こえた。椅子を引きずる鈍い音、金属音。トン、と腰掛ける空気が。

「怜、夏休みの宿題、ちゃんとやってる？」

「やってるよお！ あとね、あとね、作文とね、絵日記とね、算数のドリルやったらね、オシマイ！」

「いっぱいあるじゃない」

右手を口元にあてて、くすくすと笑う。怜は、いつも一生懸命に話そうとしてくれる。雰囲気から、声から、それはわたしにも伝わる。

はじめて会ったときから比べたら、驚くほど違う。怜は何も話そうとしなかったから。怯えるようにそこにいて、目の見えないわたしがどうやって一日を過ごしているのか、それはまるで虫を観察するように見ているだけだった。

「あ、あのね、おねえちゃん」

「なあに？」

「手、出して！ 早くっ」

訳のわからないまま、いわれた通りにわたしは手を出した。怜は差し出したわたしの手を取ると、お椀の形を作らせる。

「なんかくれるの？」

怜は何も返してくれなかった。でも、まだそこにいる。それからポツ、と、何か小さいものが手に落ちてきた。それはわたしの手の中で小さくはじけて、またポツ、ポツ、と落ち、それから勢いよくザーっと手の平へ落とされた。

「な、なに？」

「へへ、なんでしょー？」

ひとつひとは小さな粒だった。落とさないようにその内のひとつを指先でつまもうとするが、両手いっぱいに満たされた状態ではそれは難しくて、ころころと溢れていくのがわかる。

「あのね、それね、種なんだよ！ ぼくがね、がんばって育てたの」

「あー……」

種、植物の種なのか。わたしはなるべく落とさないようにしながらも、種ならいいかとなんとか一粒をつまんだ。平べったいような、両端がとがっているような、紡錘形の種だ。

「これ、……ひまわり？」

「うんっ」

元気のいい、嬉しそうな声が聞こえた。そんな怜の声を聞くと、わたしも自然と微笑んでしまう。

「すごいんだよっ、僕よりずっと背が高くてね、おっきいの！」

そういつてはしゃぐ怜の声を聞きながら、怜はどんな顔をしているのかと想像してみる。背丈は、服は、顔は、表情は、体型は、こんな風に、こんな声で話す少年は、どんな姿をしているのだろう。

「こんなにいっぱい種つけたんだね、怜、頑張ったね。すごいよ」

本当なら、その頭をなでてあげたかった。だけどその正確な位置も、よくわからない。両手に種が溢れるほどあって、よかったと思った。もしわたしの目がほんの少しでも見えていたとしても、それは叶わなかったから。

「結ちゃーん……？ あ、怜くんも来てたんだ」

入口にまた、人の気配が増えた。周防先生だと、すぐにわかった。

声がした途端に、怜が小さくなるのを感じた。

「先生？ もう、お昼？」

「いや、診察に人、来なくてね。受付時間も終わっただし、今日の仕事は終わりにしたんだ」

「いいことじゃないですか。みんな元気！」

「そうだね、」

「……何か、ありました？」

先生の声に、いつもの覇気がなかった。悲しんでいるようなトーン、なぜか。なぜだろう。わたしにはそれがわかったし、なんとなく、それはわたしへ向けてのことなんだと思った。

「いや、なんでもないよ。それよりお散歩、行くかい？」

先生は誤魔化しているつもりだったのだろうけれど、その声にはやはりいつものような覇気はなかった。けれど先生がいつもと同じように微笑んでくれているような気がして、先生も少し疲れているのかもしれない、と思った。

それなら、外の空気を吸いに行くのが一番だ。ここの空気は、とてもやさしい。

「はい」

わたしはどうして、気付けなかったのだろう。

怜に声をかけて、種を袋にしまう。全部きちんと袋に入っているのかは、わたしにはわからない。けれど怜の小さな手が、わたしの足にかけられた蒲団の上を動き回っているのはなんとなくわかった。種の回収が終わると、周防先生はふう、と息を吐いた。

「じゃあ、車椅子準備しなくちゃね。怜くんは、お昼だから家に帰りなさい。またお母さんが探しに来るからね」

「はい……」

怜は拗ねたような声を上げた。いつもより元氣のない、低い声。その姿を思っていると、妙にかわいく思えて、喉の奥だけでくつくつと笑った。

「じゃあ、結ちゃん、僕は怜くんを送ってくるから、ご飯食べて待っててね」

すぐに江月くんが持つてくるだろうから、そういった周防先生の声がする方へ小さく手を振った。多分、怜の手を引いているのだろう。周防先生は、子供が好きなんだと思う。

「ばいばい、おねえちゃ。また来るね」

「うん、ばいばい」

声がする方を向いて、胸の前で小さく手を振った。多分、笑顔で目が見えたときと変わらずに、自分がどんな表情をしているのかはわからなかった。

目の見えない相手に表情を作るのは、なんて意味のないことなんだろうと、少しだけ思った。

カタン、とドアの閉まったような音を聞き、わたしは小さく息を吐き出した。

本当に誰もいない、真っ暗な空間。いつものわたしの場所。

誰かの気遣いをつけることもなく、そうして与えられた気遣いへ逆に気を使う必要もない。こんなにも気持ちを楽しめる、だけど。

「会いたいよ……」

窓へ向かって、手を伸ばす。慣れた距離。日が当たっているせいか、そこはとても熱を持っていた。

ここから続く外の、光に溢れた外の世界のその中に、その中心に、春輝はいる。

わたしからは奪われてしまった、眩しい太陽の世界に。

約束したのに、次の夏が来たらまた会いに来るって、約束してくれたのに。

早く、早く春輝の元へ夏が来ますように。そしてここへ来て、またたくさんお話をするの。

春輝は、目の見えないわたしに見えているものの話を、とても不思議そうに聞いてくれる。わたしも周りの人も今まで気にしなかったようなことを、楽しそうに聞いてくれる。

そんな風に話しかけてくれる人を、わたしは春輝以外に知らない。

わたしは確かにこの世界で障害を負っているはずなのに、春輝と話しているとそうではない、みんながわたしにないものを持っているんじゃないなくて、私がみんなにないものを持っているような、そういう風に思えてくるのだ。

あの日、春輝に会えなかったらわたしは今でも、わたしを悲観し続けていただろう。こんな世界を、きつと捨てたくなっていた。恐怖を感じる光景など、わたしの目にはもう映らないのだから。

「――あ」

カラカラとワゴンを押す音と、聞き慣れた足音がした。江月さんだ、とすぐに思う。だんだんと足音とワゴンの動く音が大きくなり、すぐにガラリとドアが開く音が聞こえた。

「結ちゃーん、ご飯持って来ましたよー」

「ありがとうございます」

いつもと同じ、はきはきしているけれど、どこか厳しい響きを持っている江月さんの声がした。わたしは笑顔でそれを迎える。ガタンと少し大きな音がして、ワゴンが室内へ入ったのだとわかった。

江月さんはいつもやさしい。初めて会ったときからいつも元気でハツラツとしていて、私のリハビリにも根気強く付き合ってくれる。そういうはずだった。けれど江月さんは何かに驚いたように大きく息を飲んだ。そして黙り込んでしまった。

「江月、さん………どうしたの？」

「うつん、なんでもないわ。お昼ご飯、置くね」

「あ………はい」

どうしたんだろう。そう思ったけれど、すぐに江月さんはいつもの調子で食事の準備をしてくれた。テーブルの準備をして、そこに食器が置かれる音がした。

ぎこちないまま、手探りでスプーンを探す。形を確かめて右手に持つと、今度は左手で食器に触れた。江月さんはわたしの食事が終わるまで、そこでじっと見ていた。

ときどきわたしがこぼすと、「こぼしたよ」とだけ教えてくれた。わたしは手探りでそれを探し、一緒にテーブルに置いてあった布巾でそれを拭いた。

「江月さん」

「何？」

「へへ、呼んただけです」

「そう？　おいしい？」

「おいしいです」

「よかった」

さわさわと木々が葉を擦る音が聞こえてきたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1614d/>

夏の庭園

2010年10月16日13時55分発行